

泥中の蓮

とほくれす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中身はそんな話です。

完全無欠の幼馴染と、不完全不備だらけの男のお話。

目次

## 泥中の蓮

「また黒板消してんのかよ、お前がやるから誰もやらないんだぞ。それ」

「消えているからそれで良いんだよ。私は気にしてないしね」

その言葉を俺が気にしていることを、どうやらお前は気づいていないらしい。

彼方がこういう自己犠牲に走る悪癖に味をしめたのは、多分家庭環境なんだろうなと想像してる。

武家の長女というのは大変だ、聞くだけで窺い知れる。曰く『妹に面倒事を押し付けたくない』とのことだが、それを言うなら安心院彼方は安心院家という家に面倒事を押し付けられてるわけで。

ともかく。俺はこうやって、夕日の中でせらせら笑って黒板消しを手取る彼女が大嫌いである。

「進んで献身に身を割くなんて、俺には全く分かんねえな。馬鹿みたいだろ、それって」

「……………そうだね。確かに馬鹿みたいだろうさ」

彼方が伏し目がちにはにかむと、何故か俺の方を見た。意味ありげな視線だが、コイツに関してはそういう示唆の全てを詳らかにするのは無理難題となる。スルーだ。

勉学はトップクラス、読者モデルの誘いは腐るほど断り、家はそこらでは有名な武家の娘。字面だけ見れば恵まれた人生みたいな女だけど。その認識はあんまり合っていないな、と俺は思う。彼方に関するひそひそ話は多くて、恋慕なり、嫉妬なり、羨望なり、まあ色々だが至近距離で見てる側としてはあーんましの感触。

「普段はお前の周りにたかってる誰も、此処には居ないぞ」

「……………居ないよ。彼らは」

その姿形を持って囃す男も、その不可視のカーストにすり寄る女も、その誰だつて……………今此処で白いチョークを大きくなぞって、夕日に焼けていくお前の横顔なんて知りやしない。

俺だつて、知らない。見てるようで見ちやいない。分かってるん

だ、分かっている。皆私利私欲まみれの偽善者だ。

知らないよ。誰も。

「そうやって返してもらえない事ばかりして楽しいか？ いいことは必ず帰ってくるなんて嘘だぞ、人間は平気で恩を仇で返す。きつとお前がここに居ることだって、誰も知らないんだぞ」

「……………知らないだろうね、知られたくてやってる訳じゃないから知らないんだぞ。

お前が部活に入れないのが家の事情で時間ばかり取られてるからだってこと。

お前がへらへら笑ってる時は相手のことしか考えてないときだってこと。

お前がこんな事ばかりするのは、そうしないと生きていけないからだってこと。

人間ってのは不平等だと思う、高校生にもなれば分かる。やっぱり届かないものってのが有って、欲しい物を諦めなきゃいけないときも沢山ある。

でもこれって、そんなレベルの話か？

お前が欲しいのは、“ありがとう”なんてたいそれた物じゃないのに。

誰も知らないんだぞ、そんな事。

「馬鹿だな。お前、教養ばかりで馬鹿だよ。人生何時も損してる」  
「かもしれない、きつとこれからも損して生きていくよ。ごめんね」

謝られても困る。

チヨークを揃えだした。丁寧なやつだ、教師も一限目の時はいつも楽そうに黒板の前を歩き回ってる。勿論、二限目には滅茶苦茶だ。

アイツラは元の場所に戻すことも出来ない。何で彼方がそんなやつのために動いてるのかも、俺にはわからない。

学級委員長だって押し付けられてた。全然気にしてない風に気のない笑顔で引き受けていた、家に帰ればまた忙しいのに。寝不足だって言ってたろ、お前。

納得行かない。

俺はなあなあでオカルト部に入ってる。勉強も、あんましなくてもまあまあ出来る。運動神経も、壊滅的じゃない。背はちよつと低いけど、これでも女にだって全く縁がないわけじゃない。

これって幸せだ。幸せぐらい、皆平等に持つててもよくないか？

「もう全部投げ出して逃げればいいのに」

「逃げないよ、だって泥花でいかがいつも横に居てくれるから」

それじゃ足りねえよ。何笑ってんだよ、何で今に限ってそんな心から嬉しそうに笑うんだよ。どうせならいつもみたいに薄っぺらい張り付いた笑顔を見せろよ。

俺が黒板消し持つてるだけじゃ足りないだろ。お前はもつとありがとうって言うてもらっていい、よくやってるって言われていい、もつと色んなご褒美が貰えていい。

無いじゃないか。何もない、安心院彼方はいつも押し付けられるだけ。

きつとあの名家様の当主も押し付けられる。こうやって仕切りを押し付けられる、大事な時間を奪われる。報酬は、無い。

俺は我慢ならなかった。乱暴にクリーナーの上に黒板消しを走らせる。まるで暴れてるみたいだった。

「代わりに不満を言ってくれ」

駄目だろ。

「代わりに覚えててくれる」

意味ないだろ。

「代わりにお礼をしてくれる」

足りるわけないだろ。

「私より、泥花が一生懸命だから。もうそれで良いよ、私は」

「良い訳無いだろ……………」

それ以上言い返す気力がなかった。黒板消しを投げるみたいに置き直して、かばんを持つ。

酷い態度だったが、彼方は当然みたいに横に居る。

「君が待つてくれることが、私には代えがたいことなんだよ。泥花、そういうものさ……………人の幸せはそういうものだったんだよ」

「……………」

無駄な正論だ。納得する気も出ない。

合ってるよ、俺がお前の幸せ決めるべきじゃないって。お前が満足してりやそれが良いんだって。

でも俺の幸せには、お前が居ないと駄目なんだ。俺の知ってるやつが全員、ちゃんと報われてないと。

それは俺の幸せに遠すぎるんだよ、彼方。

「だから勉強はしないって言っただろ。めんどくせえ、医学部なんか絶対行くかっての」

「まあまあそう言わずに。拘りがなければ敷かれたレールに乗ってしまふものだよ」

家が中途半端に医者だったりすると、往々にしてこういう事を勧められるもんなのかもしれない。俺はお断りだ。

彼方はうちの親とも結構仲が良い。まあ品行方正に加えて眉目秀丽、文武両道と来ればそりやあ誰だって気に入るとも。俺だって、嫌いとかそういうチープな嘘はつけない。

幼馴染がこれなら心配ないな、と親父は笑った。何となく期待を裏切ってやりたかったのを覚えてる。

「というか、泥花は私が教える必要なんてホントはないんだよ。お父さんは分かかってないみたいだね……………はい、公式表。暇だから作ってきたよ」

「何処が暇なんだよ何処が」

そう言わずに、と押し付けられた彼女の手書きの公式表。字が綺麗だった、昔からこれは本当に感心してる。

しっかし時間が有るわけがない。コイツに時間なんて有るもんか、家に帰りや習い事だの催事だの。仕事も何だかんだ押し付けられる

から学校関連のだったって有る。

「マジでもう少し自分の時間を持ってよ。何がしたいんだ彼方は、俺はこんなもん用意しても賢くならん」

「……………何がしたい、か。うーん、泥花に何かしてあげたい？」

考え込んだ割には結論がガキみたいで、笑うことも出来ない。

そう言おうと寝っ転がってた体を起こすとふと目線があつてしまう。場違いに澄んだ翡翠の瞳、髪も手入れなんかしてないってのが嘘みたいに綺麗で滑らか。

相変わらず、慣れない。俺も高校生だ。正直自分の部屋に女がいるだけで、本当は気が気ではない。

「はあ。お前もうちよつと警戒しろよな、幼馴染とは言え男の部屋にポンポンと出入りするの如何かと」

「ふーん、泥花って私をどうにかしちやおうと思ってるんだ？」

「寝言は寝て言え」

傾国の美女に手を出せるだけの金がねえ。

つつーか母親もおかしい。彼方がうちで夕食を食って帰つても何も言わない、そんな時間まで女の子が男の家にいるなよとしか言いようがねえ。

もうないないづくしだ。常に半ギレ、やさぐれボーイにはちよいときつい。

公式表をベッドに置いてもう一回寝っ転がる。

「もう諦めろよ……………俺は適当にやって適当な大学出て適当にこき使われてりゃ良いんだから」

「せっかく頭いいのに勿体ない」

そんな事はどうでも良いのだ俺には、ゲームができりやそれでいい。

寝っ転がってしばらく彼方を放置する。彼女も暇ではないのはやっぱりそうで、そのうち一緒にやる予定だったらしき課題を一人でばばばと解いていってしまう。シャーペンがノートを走る音がまるで途切れない、さすがというか。

ぽりぽりと母親が持ってきたせんべいを食べる音がした。遠慮し



すぎるのは良くない、というところまで気が利く女なのでもらったら割と食ってしまう。曰く「こういう普通のお菓子、あんまり家で食べれないから美味しい」と言っていたが、何処までが真実なのやら。

ぽりぽり。

ぽりぽり。

ぽりぽり。

ぱりっ。

視線を感じる。凄い視線を感じる、わぎと寝返りを打った、まだ視線を感じる。

俺は気づかないようにした。絶対気づかないふりをする、今日こそは帰らせる、絶対に俺は負けないからな。

「……………せつかく作ったのに、使ってくれないんだ……………」

おいやめろ、その寂しそうな声をやめろ。そんな声出したって俺は……………俺はだな……………うう。

畜生使うよ、使えば良いんだろくそつたれ！

思い切り体を起こして公式表を手を取った。

「ええい鬱陶しい奴め！ 覚えりやいいんだろ覚えりやよお！」

「……………相変わらず甘いね」

「うるせえペテン師め！」

声に反して彼方の顔は意地の悪い弧を描いている。いつもこうだ、俺が押し負けるのをいいことに泣き落とし狙い。

しかし俺には逆らえん……………他ならまだしも、彼方だと勝てない。

渋々公式表を読む。彼方がふにやつと笑うので、何かもう諦めたほうが速いんだろうかなんて一瞬思いそうになったが、俺は諦めることを諦めることにした。

「嫌なもんは嫌だ。今回だけだからな」

「そう言って毎回付き合ってくれるくせに」

やかましい。